

森に学び森に生きる

佐藤清太郎（秋田森の会・森と風のハーモニー代表）

林業への夢を

私の祖父は、家から少し離れた場所で製材所を営んでいたのですが、父と母は農業と山仕事、冬の間は炭焼きをなりわいにしていました。祖父は全てに厳しく、農林家を継ぐ者は机の上での勉強も必要だが、それよりも大切なのは、自分の身体で覚える体験学である、他人の家で寝起きを共に過ごして仕事をし、同じ釜の飯を食べなければならない、ということに信念を持っていましたので、私が農業高校を卒業すると、すぐに長野県の農家をお願いをし、実習生として6ヵ月間住み込み修業することとなったのです。

生まれて初めて集落を、そして家を離れて、遠い地での生活は不安だらけでしたが、研修先の農家や地域の良い人たちに恵まれて、とても楽しく充実した体験修行でした。同時に、祖父の教えたとおり、他人の家の食事をいただくありがたさを身にしみて感じました。

6ヵ月の体験修行を終え、家に帰ってきましたが、何をやったら良いのか分からないままに、実習先の農家で学んだ切り花栽培を少しずつ始め、冬期は、父と炭焼きや夏に伐採した丸太を雪車で麓まで搬出する作業などをやっていました。炭焼き小屋で父と一緒に仕事をしながら教えられた知恵や技術は、今でも私の山の仕事の原点になっており、ありがたく思っています。

そのころ、山への思いは少なかったのです。その理由は、農業では1年か2年でおおむね収穫とその収支が判るのですが、林業では、数十年、特にスギの植林になると50年以上、100年もかかる。そんなことで、祖父や父と話し合い、製材所と稲作と切り花の三部門を営み、生計を立てて行くこととしました。そして冬期は炭を焼き、翌春、炭材を生産した山へスギを植林するといった方針をスタートさせたのです。

十数年間、スギの植林を続けてきました。下刈りや除伐などの保育作業を行うことで、楽しみの森に変わっていき、また農業も少しずつではありましたが、米価が上がり、スギの丸太もようやく高く買ってもらえるようになり、農村に明るいきざしが見え始めた時でした。私が担当していた切り花部門も、市場開拓するために多くの花屋や市場に足を運び、遠く札幌まで出荷することが出来るようになりました。

そうしたときに、秋田県主催の長期研修「林業教室」のことを知り、参加することにしました。いざ参加してみると、参加者のほとんどは大山林所有者の後継者で、しかも高校や大学で林学を学んできて、すでに林業に携わっているベテランの人たちでした。「林業教室」の学科の講義は、一週間泊まり込みで、私にとっては大変苦しい時間でした。それは、林業用語の意味が全く分からないことと、その用語の多さからでした。何故こんなにあるのか、木材について例を挙げると、使用する部材の全てに名前や用語があるのです。もうやめようかと思いましたが、いい仲間たちに支えていただき、なんとか学

科を終えることができましたが、もしテストがあつたらだめだったと今もその時のことを思い出します。

学科の次は、山に入つての現場実習です。植林実習のときに疑問に思ったのは、植林場所に1.8m間隔で正方形になるよう縄を張り、その交わつた所に3,000本の苗木を田植えのように植えるのですが、水田と違い、山は平らでなく様々な障害物もあるのに何故なのか、ということでした。

現場実習は、下刈り、除伐作業と進み、20年生くらいのスギ人工林での間伐実習に入つたときでした。研修生各自にテープを渡されて、間伐する木に巻き付け、それを伐採する作業をするということです。林学を学んできた仲間たちは、どんどん巻き付け、伐採作業に進んでいるのですが、私は、何か違和感を覚えました。仲間に「何故、みんながどんどん切り捨てるのか」と聞くと、「間伐作業には密度管理の表があり、それを参考に何年生になったら密度管理の表に沿つた本数まで伐採する、そして、木と木の間隔は何メートルくらい離すべき」とのこと、私には、なんとも理解できないことばかりでした。

そんな作業を行つて、最終的に伐採するときの本数を問うと「700本から1,000本あればいいのだ」という答えに、またまた驚いた。あれほど苦勞して3,000本を植林し、下刈りや除伐などの保育作業をして育ててきたスギが切り捨てられるのかと。でも、これ以上質問することはばかられた。なぜなら「お前、林学を知らなすぎる」と言われるであらうと感じたからです。

3本巢植えに挑む（挑戦）

それから、「林業教室」で学んだことを参考に、山仕事を続けていましたが、林業に関して多くの疑問を持っていたのに、普段の私なら「なぜ、どうして」ということに対して、不思議にそんな気持ちも起こらず、3,000本植えの拡大造林を進めてきました。

1980年代後半まで拡大造林を積極的に推進してきました。ところが、大面積を持つ山主さんが、保育費用が増えて十分な管理ができなくなったということを伝え聞くころ、保育管理の低コスト化を推進する方向が示されるようになりました。原木丸太の価格も下がりはじめ、林業経営は厳しくなっていく中で、せつかく植林したスギ林を考えると、やりきれない気持ちがありました。我が家の林業計画では、このまま拡大造林を進めて行くことが必要でした。

しかし、これからの林業経営を考えたとき、どうして3,000本植林でなければならないのか、低コスト林業を目指すには、植林本数を減らすより方法はないのではないかと。もし、1,000本少なく植林すれば、現在の経費の3割を節減できるのではないかと考え、現場で実行しようとしたのですが、具体的にどうすべきか考えることがたくさんありました。そのため、県内の指導林家を視察させていただいたり、林業関係の本などで勉強したのですが、私の目指す施業方法の参考になることはなかったのです。

そんなとき、ふと、祖父が言っていた「山で悩み、苦しいときは山に行き、山をよく見る。山の声を聞け。山が教えてくれる。山の木を見るには、頭を上げて上を見るのが良い」という言葉を思い出したのです。どうせ私は素人、失敗しても笑われてもいい、そう心

に決めて自分の山、スギ林を歩いたのです。

風の強く吹いている日でした。大きなスギ林で見つめていると、3本や5本の群れになっている所の木は、ゆっくり揺れている。その姿はみんなで寄り添い、お互いに助け合っているように私の目に見えました。そして、林内に生えている広葉樹は、防風林の役目を果たしているように見えたとき、これが、もしかしたら私の目指す林業の方向ではないかと思ったのです。

1980年より、1.0mから1.2mの三角形の頂点にスギ苗を植林する3本巢植えを所構わず植えたり、群状の巢になるような間伐を行ったのです。植林は多くの場所で失敗しましたが、よく育った所ではノウサギの食害を受けることがありました。

1984年、雑木林の伐採跡地10aに、3本巢植え70セット、210本の試験地を作ったのです。父は植えたばかりのスギ苗を降雪前に1本1本稲わらで束ね、ノウサギの食害を防ぐ作業をしてくれたのです。素人の私が「なぜ、どうして」との思いが、山を歩くことで山が教えてくれたこと、父が手助けしてくれたことのおかげで、一步步ですが3本巢植えの方向が見えてきたのです。

しかし、これからが大変でした。植林する本数が少ないので、全ての苗木が健苗であって欲しいと考え、種苗業者の仲間に相談したほか、ある先生は「秋田は雪の害を考慮して、3本の苗木の系統を異なるようにした方が良いのでは」などのアドバイスをいただきました。また、このとき初めて知ったことですが、造林補助金を利用する場合、秋田県では1ha当たりの最低植林本数は2,400本とのことで、造林補助金を受けるには該当しないのです。でも、コスト3割削減を目標設定した私は逆に補助金をいただかなくても、という気持ちを強く持つことになりました。

3本巢植えを進めていくうち、いろいろな課題に突き当たりましたが、まずは現場でやってみようということで、択伐や間伐した跡地に3本の巢植え行ったり、広葉樹の中に巢を作って針広混交林化を図るなど拡大していきました。2010年までの目標は、5,000巢と考えていましたが、なかなか大変なことでした。地拵え・下刈り作業は、植林地全面の刈り払いを行わないで、巢の周りの坪刈りを3年間くらい実施しましたが、その理由は森の生きものたちへの配慮と、周辺に生えている雑草木のもたらす防風効果のほかに、広葉樹の若木や太い根株からの萌芽は、混交林へと誘導するパートナーとなることを期待し、刈り払わないよう気をつけて作業を行いました。

巢には、3本のスギがあるのですが、一つの巢を一本の木と考えると、1ha当たり700巢が700本ということになり、特別なことがない限り除伐や間伐をしないことにしました。

そんな試行錯誤している時期、大日本山林会元会長の山口伊佐夫先生が数回この森においでくださり、雨や風に対する防災効果から考えても、この方法は面白いようだと言われ、「スギ3本巢植え環境順応造林法」と命名してくれました。

自然からの洗礼（林業経営から森林経営）

針広混交林を今後の中心施業にするべく、広葉樹林内に巢を作るなどして植林してきた「スギ3本巢植え環境順応造林法」を始めてから8年、順調に生育していたのです。

が、1991年9月28日、台風19号が強風を伴って本県を通過しました。私の森では手入れをした高樹齢のスギ林を中心に壊滅的な被害を受けました。数日間かけて被害調査をした結果、強度の間伐を実施した林分はほぼ全滅の状態でした。

その中で、3本巣植えたスギが所々に顔を出していたのには、元気づけられたのです。ただ、巣の周りには、倒れたり折れたりした大木が転がっており、巣のスギを助けようと思うのですが、作業をする足の置き場ないのです。仕方なくそのままにして生育状況を見守ることとしましたが、その林は現在いいスギ林となって順調に生育しています。

また、3本の巣を参考にして群状になるよう間伐をした林分は、普通の間伐をした林分に比較して被害が少ないなど、針広混交林造成場所では植林後まもないこともあってか被害がないことなど、いろいろなことをこの台風から学んだのです。今回の台風で大きな被害を受けましたが、調査の結果を考えると、その被害の発生は、天災という要素が5割、施業方法によっての人災が5割ではないか、この結論付けが今後大きな教訓となりました。

「健康の森」と「秋田森の会・風のハーモニー」の誕生

1979年頃より所有森林の一部を一般の人々に開放し、森遊びを楽しんでいましたが、1991年9月5日、14名の仲間で会員制の会をつくりました。その記念すべきオープンイベントの日、台風19号の直撃を受けて中止、この日を楽しみにしていただけに厳しい洗礼でありました。多くの会員から、森は大丈夫かとの問合せや励ましの電話、そして後片付けに駆けつけてくれる方など、心温まる元気をもらい、数日後改めてイベントを開催しました。30名の会員が参加、台風の被害木を集めて供養してやり、「健康の森」での今後、活動を進めていくことを誓ったのです。

この台風や会活動を契機に、経済林としての森も良いのですが、一般の方々と一緒に森をつくる「みんなが参加する森づくり活動」も取り入れた、森林経営へと移行する決断をした時でもあります。そのためにも、大人でも子供たちでも判りやすい言葉を使って話しかけたり、森の話をしたりしました。そして、自由に走り回り、森の恵みをいただけるにぎやかな森であって欲しいことを願い、次のように会報に掲載して会員に伝えました。

『健康の森は、全てが平等で自由です。

誰かが誰かに何かをあげることとか、指導することではなく、一人一人が自分で考え、自分を信じて行動する。そうする中で、自分を知ることになるのです。』

「健康の森」と森の保育園

1994年から始まった森の保育園は、今日まで30年近くも続いています。雨の日も、雪の日も、多くの子供たちが森に遊びに来てくれ、今年のコロナ禍のなかでも80回、4,000人もの子供たちが森の中で泥んこになりながら、走り回り遊んでいます。以前から、子供たちが家族を森に連れて来て、子供たちが案内する森ができれば良いな、と願っていた

ましたが、保育園の協力があり、「親子で森体験」ということで実現しました。子供たちが森に入る前に必ず約束することがあります。それは、自分のことは全部自分で決めること、先生や保護者には、危ないからやめなさいとか、それをやったらダメという行動を止める言葉は使わないことをお願いしています。子供たちの自立心・生きる力・協力し合う力・戦う力・少し怖くても冒険する力・その場その場で対応する力などを育てたいと思っているからです。

私は、子供たちが訪れるとできるだけ一緒に森を歩きますが、子供たちの質問責めに合います。「これなあに、どうしてここにあるの？」等々。子供たちに判るように答えられないと、「おじさん、ダメね」と叱られます。子供たちから森の中で、多くのことを教えられている毎日です。

未来へはばたく「健康の森」

「健康の森」を持続可能な機能を持ちながら、多様性ある森にして、子供たちへの贈り物にしたいとの願いがあります。そのためには、森林所有者として越えなければならない課題が数多くあります。その中でも、森を維持・管理していくためには経費が必要ですし、少額でもいいが、家計の足しになることも大切なことです。その対策は、森林資源の有効活用を図りつつ、新たな資源を造成しなければなりません。しかも50年、100年先を見据え、森林の持つ公益的機能を考えながら施業を行う必要があると強く思っています。

こういった考えの中、私は、「健康の森」を3つのゾーンに区分けして施業を行う素案を計画しました。「健康の森」の総面積は30haほどありますが、大まかに区分けして、スギ人工林を主体とする針葉樹林は20ha、雑木林が中心の広葉樹林が7ha、その他、雑草やツルなどの低木が多くあり、現在はやぶの森としてあまり入れないところが3ha位あります。

今後、社会・経済・生活様式がどのように変わるのか分かりませんが、今現在で小面積森林所有者が出来ることは何かを考えた、それぞれの区分ごとに大まかな施業項目と考え方を申し上げます。

「スギ人工林」は、「健康の森」の大黒柱であり、全てにおいて今後を大きく動かす林であり、これからも施業等々重要であると考えています。施業は、針広混交林化とスギ3本巢植え環境順応造林法の考えを、最大限に生かして行います。高樹齢林では、長伐期優良大径木生産を目指します。また、80年生林では、間伐後の跡地には高樹齢林とともに空間地へスギや広葉樹の巢植えを行い、森の担い手として低コストの保育作業を行います。同時に、資源の有効活用からも、持続可能な収入源として計画性を持って行います。50年生以下のスギ林については、長伐期大径木になるような施業を、繰り返して行う考えです。

「広葉樹の森」では、広葉樹林の持っている特殊性を生かして手入れを行うといった管理を優先します。特に、人間の健康と森についての考え、春夏秋冬の森の彩りと季節ごとの森からの恵みを大切にしながら、峰の保全・環境との調和に努めていかなければ

ならないと思います。

また、森の保育園のように森遊びの中で、森と友だちになり、森を育てる人になって欲しいと思っているので、森の保育園は続けていく考えです。森林浴を中心に、高齢者の森林リハビリテーションや、若い人のアウトドアへの協力、広葉樹資源を活用した特用林産物や暖房用の薪など、多岐にわたる活用を検討するつもりです。

やぶの森～生物多様性の森～

今回の計画立案の中で、一番勉強をしたのが、「やぶの森」のことでした。林業経営でも森林経営でも出てこない、生物多様性を保護するとして、私は簡単に考えていました。しかし、1年を通してやぶの森とけもの道を数回歩き、自分の目で見て、やぶの中に入り体験したことが、このたびの「健康の森」の立案示唆でした。

そこで考えさせられたことは、人間よりもはるかに森のことを大切に、大事に生きている生きものたちが、お互いに身を寄せ合い、生活していることを自分の目で見たのです。スズメバチに刺されるといった体験をしたことなどから、深く考えることになりました。

「やぶの森」、生物多様性の森の重要性を再認識するとともに、この森で共に生きる者と考え、何かお手伝いできないだろうかと考えましたが、森の生きものたちは、ありがた迷惑というだろうか、それとも、喜んでくれるのでしょうか。それよりも、都市開発等で生じた産業廃棄物や残土を捨てるなどか、病害に見舞われて豚や鶏を、森に穴を掘って埋めないでくれというのでしょうか。長い年月を考えると、これらのモノは、いずれ私たちを含め、生きものたちの生命である飲み水に現れる可能性があります。

私の人生の時間は、あとどのくらいあるか分かりませんが、「森を育てる人を育てる」思いを強く持って森林経営を続けたいと思っています。